

	<h1>ふくりゅう</h1>	特定非営利活動法人 日本下水文化研究会会報
		発行責任者 酒井彰(運営委員会代表)
		平成 29 年 12 月 26 日 通巻 92 号

ふくりゅう 92号 目次

関西支部の活動を終えるにあたって	木村 淳弘	1
第 14 回下水文化研究発表会報告		2
座長報告	中西正弘／酒井彰	2
特別企画:シンポジウム“サステナブルな援助とは”報告	高橋 邦夫	4
バルトン来日 130 年記念講演会報告	石井 貴志	5
石井明男氏にバルトン記念賞授与		7
バングラデシュ便り No.40	高橋 邦夫	8
海外技術協力分科会から／運営委員会から／編集後記		10

※タイトルをクリックするとその記事にジャンプします / ページ番号をクリックすると目次に戻ります。

関西支部の活動を終えるにあたって

関西支部長 木村 淳弘

この度、諸般の事情により、2017年9月9日の講演会・拡大運営委員会（支部総会）を最後に、関西支部の活動に終止符を打ちました。

平成5年（1993年）の支部発足以来、25年間にわたり皆様には支部活動にご協力を頂き有難うございました。

支部はこれまでの活動を通じて、水環境への下水道の重要性について PR し、皆様と一緒に考えて参りました。

現在、汚水処理率は、ほぼ90%台に達し、河川・湖沼・海域の水質は大幅に改善され、併せて水質環境基準も達成されました。そして、逆に大阪湾・瀬戸内海では貧栄養化問題が浮上している様な状況です。

汚水処理施設がほぼ概成し、その施設を「守り育てる」時代に入っている現在、今後の下水道は水環境全体のバランスの中で、新たな問題を解決していかねなければなりません。関西支部として、先進地視察などその道筋の走りにも携れた事で、一応の目的を達したものと考えています。

関西支部は、平成5年に稲場紀久雄氏を関西支部長として発足し、講演会の開催、大阪府の下水道フェスティバルなどに参加して、活動を行ってきました。

その後、平成15年より、支部長が木村淳弘に変わ

り新制関西支部がスタートしました。そして、同年4月25日に第1回関西支部運営委員会が開催され、関西支部の活動方針が協議されました。この運営委員会で、活動方針として、1)総会を兼ね講演会・パネルディスカッションを開催する、2)大阪府下水道フェスティバルに参加する、3)見学会を開催する、4)機関紙（関西支部だより）を発行する、5)他のNPOとの交流、情報交換、研究会、勉強会等を会員の要望によって企画する、などが決定されました。その後、15年間にわたりこの方針で活動を行ってきました。

1. 講演会、意見交換会

支部総会を兼ねて、講演会・パネルディスカッションを13回、下水文化研究発表会を2回、また、水環境についての意見交換の場として「水環境をかたる会」を13回開催しました。

2. 見学会

水環境に関する見学会を15回開催しました。

3. 機関紙の発行

関西支部の機関紙として関西支部便りを第1号から第29号まで発行しました。

4. 出前講座

小学生への水環境、下水道のPR活動として出前

講座を 4 回行いました。

以上、関西支部が直接主催した活動であります。

5. イベントへの参加

自治体、市民団体などの水環境に関するイベントに 31 回参加し、PR 活動を行いました。

6. 市民団体との協働

(1) 関西水環境ネット

関西の水関係の市民団体と情報交換をするため、平成 16 年 5 月 28 日に日本下水文化研究会関西支部が事務局となって「関西水環境ネット」が設立されました。会員団体、13 団体で構成され、情報交換会を 40 回開催しました。

(2) 他の市民団体との活動

日本下水文化研究会関西支部は「東本願寺と環境を考える市民プロジェクト」、「市民ボランティアネットワーク『石津川に鮎を』」、「大和川市民ネットワーク」の構成員として市民活動を行いました。

① 東本願寺と環境を考える市民プロジェクト

平成 15 年に、京都の東本願寺を拠点として環境に関する市民活動を行う目的で、結成され、東本願寺のお堀の清掃、生き物調査を行う「お堀探検」、東本願寺の庭園（渉成園）での「自然観察会」、そして、明治時代に建設された、琵琶湖疎水の水を利用した防火施設「本願寺水道」の保存活動などを行っています。 37 回のイ

ベントに関西支部は構成員として参加しました。

② 市民ボランティアネットワーク『石津川に鮎を』

平成 15 年 NPO 水環境フォーラム、日本下水文化研究会関西支部と堺市内の市民団体とで、堺市内を流れる石津川の環境を改善する市民団体として結成され、水質調査、イベント「葦船まつり」の開催、「アドプトリバー鶴田町」を立ち上げて河川清掃の実施、堺市内の各種イベントへの参加、河川の生き物調査などを行っています。43 回のイベントに関西支部は構成員として参加しました。

③ 大和川市民ネットワーク

平成 20 年に大阪府民と奈良県民の有志が、大和川の環境改善活動のため「大和川市民ネットワーク」を結成した。その後、講演会、見学会、各種イベントへ参加、小学校の副読本「わたしたちの大和川」の出版などの活動をしています。19 回のイベントに関西支部は構成員として参加しました。

以上、関西支部が行ってきた活動の概要です。

私が関西支部長になってから 15 年間、多くの人達と、知り合い、ともに学び、活動をしてきました。これも、皆さんのご協力のおかげであります。この場をお借りして、お礼申し上げます。

第 14 回下水文化研究発表会報告

11 月 18 日（土）、隔年で開催されている下水文化研究発表会が新宿区 NPO 協働推進センターにおいて開催されました。1991 年に第 1 回下水文化研究発表会が開催されてから、4 半世紀が経過したことになります。今回は、午前中に 2 つのセッションで 8 編の論文が発表され、午後からは、「サステナブルな援助とは」と題するシンポジウムが行われました。座長ならびにシンポジウム・コーディネータから報告します。

セッション I（座長：中西正弘）

セッション I では、「水文化史・研究」に関する 4 編の発表があった。

地田修一さん（日本下水文化研究会）の発表「船頭が語る肥船の実態」は、「昔は肥やしと言えば下肥であった」と語られていることを裏付ける幾つかの資料（肥船の船頭からの聞き書き、古老の思い出話から想を得た物語など）の内容を説明し、肥船の船頭の具体的な行動や微妙な「心のあや」を紹介するものであった。

図録【『特別展 肥やしの底チカラ』（葛飾区郷土と天文の博物館、2013 年）】、児童書【『新河岸川の八助』（文・花井泰子、絵・まえだ けん、けやき書房、1990

年）】、【『利根川高瀬船』（渡辺貢二、崙書房、1990 年）】に出てくる肥船の船頭や古老の話から肥船の実態を探った。

新河岸川（埼玉県川越市郊外を源流とし和光市新倉で荒川に合流）を上り下りする船には並船、早船、急船、飛切船の 4 種類があった。浅草までの「下り」には特産のサツマイモなどの農産物や木材などが、代わりに川越までの「上り」には金物や酒、酢、塩、油のほか金肥と呼ばれていた下肥が運ばれていた。並船は長い時間（往復で 7～20 日間）かかってもよい木材などを運び、早船は 4～5 日で一往復する乗客を主とする定期の屋形船。急船は急ぎの荷物を 3、4 日で運び、飛切船は今日下って明日上るといふ鮪な

どの鮮魚を扱っていた。

栗田彰さん（日本下水文化研究会）の発表『江戸名所図会』の江戸下水は、江戸名所図会に描かれている江戸の町の下水の様子を解説した。江戸名所図会は江戸時代後期の江戸と江戸近郊の神社・仏閣や名所旧跡を紹介した案内書。江戸名所図会に少しでも下水が描かれているものは 168 枚あった。その中から 7 枚を選んだ。

①両国橋②高田八幡宮（穴八幡）③馬喰町馬場④筋違八ツ小路⑤日吉山王神社⑥神田明神祭礼其二⑦三ツ橋の図会に描かれている下水について述べた。

山崎達雄さん（京都府立大学）の発表「昭和初期の京都の観光政策と有料便所」は、京都市が昭和 5 年（1930）に全国に先駆けて観光課を設置し、嵐山、恩賜京都博物館、円山公園に有料の洋式水洗式の公衆便所を設けた経緯を解説した。

京都市は当時、奈良市、大津市、伏見市と「四都市遊覧施設協議会」を結成し、簡易洋式ホテルを始め四都市連合物産館、四都市遊覧案内所等、観光客の誘致を共同で進め、特に外国人観光客が日本を訪れて困る便所の対策を行った。

京都市を訪れる外国人の 80%以上を占める欧米人は、小さい時からしゃがむ習慣がないので、和式便所で「用を足す」のはなかなか難しく、外国人の誘客を図るには排泄の問題を解決することが大変重要であった。旅館にあるしゃがむ和式便所を腰掛式に改める必要があり、旅館では取り外しが簡単にできる腰掛けを便器に設けたが、外国人観光客が訪れる主要な観光地には洋式の公衆便所が急務であったという。

稲場紀久雄さん（生命環境文化研究所、大阪経済大学名誉教授）の発表「下水文化と水循環文化の関係」は、下水文化と水循環文化の関係性を基に両事業一元化の必要性を論じ、実現方策を提案したものであった。水を守る「下水文化」は健全な水循環サイクルを成立させる「水循環文化」であり、水循環文化は「水循環の健全化」を図るものという視点に立つ時、上下水道事業の管理は一元化されなければならないという。

稲場さんは、特別の法律に基づいて地方ブロック別に設立された水循環法人が技術者をプールし、地方ブロック全域の地方自治体の要請に基づき上下水道事業を代行する政策を提案、日本下水道事業団をその母体として、発展充実の道を探ることが現実的であろうと述べた。

このような組織が誕生すれば、非常時（災害時、渇水時、水質事故やテロ対応など）における法律行為も

適法に進み、新組織には再生製品の生産・流通などを行う営利部門を付設すべきであるとした。

研究発表の後に行われた質疑応答では活発な議論が交わされた。

セッション II(座長:酒井 彰)

セッション II では、海外での水供給・衛生に関する 4 編の発表があった。

鈴木綾希子さん（東京大学大学院）の発表「飲料水供給技術の受容における社会ネットワークの影響に関する研究」（共著者：坂本麻衣子）は、インド農村でパイプ給水が導入されたのちの人々の水利用行動の変化と社会ネットワークの関連を分析したものである。結果として、リーダー的存在ではないが、ふだんから多くの人とのネットワークを維持している人の行動が、関わりをもつ住民の水利用行動に影響を与えていることが示された。飲料水供給技術が、地域コミュニティで受容されるためには、個人の特性ばかりでなく、住民の日常行動をとりまくネットワークの対応を考慮する必要性が論じられた。質疑では、女性の行動だけでなく、男性の行動についても当てはまるのか、維持管理を担うグループ形成に応用できるのかといった議論がなされた。

菊池美智子さん（国立国際医療研究センター）の発表「途上国都市部スラムにおける衛生行動に関する行動変容を目的とした研究動向：文献レビュー」では、日本下水文化研究会の海外活動とも関連の深いスラム居住者の衛生行動の変容に関する 2013 年以降の研究動向が整理され、14 編の論文がレビューされた。劣悪なスラムの衛生環境を改善するためには、共同トイレなどの導入だけでなく、スラム住民の衛生行動の変容が求められるが、いくつかの行動モデルが紹介され、これらに基づいて人々の行動に関連する因子は個人特性から社会構造に及ぶという発表であった。質疑では、自分たちでトイレをきれいに使うのか、清掃人に依存するのか、どちらに合理性があると言えるのかといった議論があった。衛生行動の変容を促すための介入策についても言及され、今後の活動に寄与する発表であったと言える。この課題を扱った欧米の研究が多数あり、衛生分野での行動変容に関わる理論的モデルも提案されているのに対し、我が国ではほとんど研究されていないことは残念なことである。

酒井彰（流通科学大学）らの発表「都市スラムにおける下痢症リスク低減に向けた啓発活動と住民の意識・行動変化—スラム間の相違と変化の継続性—」は、

考えられる下痢症感染経路ごとのリスクの大きさについて分析した結果をスラム住民と共有する目的で行われたワークショップによって、住民の衛生行動に対する意識がどう変わったかということを示した。自らの努力で改善可能な行動については、複数のスラムで変化がみられており、1 年以上経過しても変化が継続していることが示された。質疑では、下痢症感染経路ごとの科学的なリスク評価と住民のリスク認知に差があることについて、最もリスクの高い水遊びからの暴露ではなく、手からの暴露の方が、リスクが高いと住民が認知しているのは、公衆衛生分野で長らく取り組まれてきた手洗い行動の意識啓発活動による弊害ではないかなどが議論された。

Qazi Azad-uz-zaman (JADE Bangladesh) らの発表 “Factors influencing payment for sanitary improvement: experience from rural areas of south-western Bangladesh” は、共著者である酒井によって行われた。この発表内容は、日本水フォーラムの助成金や本会会員からの寄付も得たクラウドファンディングを資金源として、ソーシャルビジネスとして実施されたトイレの普及活動に関する報告である。分

割支払いを励行している人とそうでない人での個人特性の相違を分析しようとしたものである。支払い状況の良くない者の多くは、そもそもトイレを購入したという意識がなく、支払い責任も欠如している。このような状況を産みだしてしまったことを教訓に次につなげる必要があるとともに、他の発表であったように、個人レベルの因子だけで説明しようとした点は再考が必要であろう。この発表に関連して、衛生に関しては、飲料水供給に比べて優先順位がどうしても低くなるが、開発途上国でも収入が増えることによって、トイレにもお金が回せるようになるのではないかと、そうした時に普及を促進する突破口を得るには、地方行政の関与も必要になるのではないかと議論があった。

どの発表論文も、人々の行動は何に左右されるのか、行動変容を促すような介入はどうあるべきかという課題に関連している。水と衛生の問題はハードの普及で済むものでないことは言うまでもなく、行動変容に関わる研究は、都市スラムでの活動だけでなく、ソーシャルビジネスの場においても、ますます重要になっていくと考えられる。

特別企画シンポジウム報告 “サステナブルな援助とは”

シンポジウム・コーディネータ 高橋 邦夫

本シンポジウムは、『バングラデシュにおける安全な水の確保、衛生問題に関する諸活動』を通じた、サステナブルな援助とは何か？、そしてその筋道は？、サバイバルからサステナブルへ？について議論するという企画である。サステナブルな援助とは、今の生存を、より将来の見える生存に寄与する援助、援助が地域住民に受容され、住民が自らが選択・施行するよう定着すること、と言い換えても良い。以下に、4 人の講演者の演題と要旨を述べよう。

講演 1. 川原一之 “「シャムタ」が語る国際協力の持続可能性”

まずは、日本で考えた「現地に適した技術」と現地住民が「喜んで受け入れる技術」の間には落差があるという指摘である。それは、プロジェクトが終わると、プロジェクト期間に実践した砒素との闘いを継続する努力をせず、日本人にプロジェクトの再開を期待する村人の姿だった。「行政機関も地域社会もプロジェクト期間だけ付き合っ、終わればその事業を忘れていく」。そこで地方行政（ユニオン）による飲料水サービス支

援事業へと進展を見せていくのであるが、「プロジェクトがつくりあげたシステムを定着、普及させるには、システムの中に人びとがすすんで動かしていく何らかの動機づけを仕込むことが必要ではないか」。つまり「おいしい。いつまでも飲みつづけたい」と欲求することを根底に置いて、はじめて成就するものだった。そして「将来にわたり啓発活動を継続して、砒素に汚染された水を飲まないように警告しつづけないと、シャムタ村が砒素汚染から解き放たれたことにはならない。」と結んでいる。



シンポジウム“サステナブルな援助とは”

講演 2. 村瀬誠 “バングラデシュにおける飲み水の危機を救う天水活用の推進”

隣人が困っていればお互い助け合うというのが人間、それがヒューマンスピリットだという立場から、飲料水源に恵まれない沿岸域農村における水道は小規模で分散型の天水源を設置していくことこそが持続可能かつ、実施可能な解決策と言えること、そしてそれは、人材育成を伴う現地生産・現地消費を基本に据えた活動を意味する。受益者が天水タンク設置の意義をよく理解し自ら進んでお金を払って手に入れた場合は、タンクは大切に扱われしっかりと管理されている。すなわち需要者の理解とオーナーシップをいかに育むか、それが天水利用をソーシャルビジネスへ展開するための基本要件であるとの主張である。

講演 3. 高橋邦夫 “農村地域におけるエコサン・トイレの普及活動”

まずはエコサン・トイレ導入に関する工学的合理性・便益の実証を、次いで、それが多くの住民にとっての選好に合うこと、個々の住民が、また集合体としてのコミュニティが便益を顕在化したものとしての認識に至ることの道筋を述べた。そして便益の顕在化とは要するに目の前にある利得(金)であればよりわかり易いという指摘である。トイレユーザー、それを管理するCBO、さらに乾燥肥料を消費する農家のいずれものステークホルダーが何らかの顕在化した利得を得るという帰結を必要十分条件として主張し

ている。

講演 4. 酒井彰 “都市スラム住民への衛生に関する啓発”

社会関係資本が脆弱なスラム地区で、十分な社会的準備を行わずに、バイオガスシステムによるトイレ改造工事に着手してしまった例を取り上げ、次のような議論の展開を主張している。すなわち、モノの提供が目的の一つとしてプロジェクトのなかで先行し、その後で自立的管理を担うために啓発活動やトレーニングを行うのではなく、社会的準備が整っていることを、投資を必要とする介入の条件とするという流れに変えていく必要がある。つまり、モノの提供以前に、当該の問題に最も関心と責任のある人たちが共助的活動を経験すること、共助的活動を積極的に担った人材がコミュニティ組織に参画し、住民の衛生行動の変容を促すとともに、衛生設備(共同トイレや共同利用設備)の管理に携われれば、都市スラムに衛生的な生活環境が定着することができると期待されると結んでいる。

以上は個々の苦労話ではない。様々な目的と機能を持つ援助が当該地域住民に受容され、持続的に定着するため、「援助の意味するところの住民への動機づけ」、「オーナーシップとビジネス化」、「便益よりも目に見える利得に結び付く方策」、「モノの提供以前の共助的活動への介入」は、援助の課題を指摘したものであるとともに、サステナブルな援助のための必要不可欠な体系の部分を示唆するものである。詳細は、次年度機関誌に掲載することとする。

バルトン来日 130 年記念講演会

バルトン研究会 石井 貴志

研究発表会当日、午後4時から同じ会場で、「バルトン来日130年記念講演会」(バルトン研究会企画)が開催されました。

お雇い外国人バルトン氏(W. K. Burton)は、ご存知のように、我が国の上下水道近代化に大きな貢献を果たすとともに、写真の分野でも、それまで主流だった湿板写真術に代わる乾板写真術の普及に努め、さらには明治時代における東京のランドマークだった「浅草凌雲閣十二階」のデザインなど、文化的側面でも数々の足跡を残し、近年は名探偵シャーロック・ホームズの作家コナン・ドイルの幼馴染だったことでも注目されています。今回の講演会は、2017年が1887年(明治20年)、帝国大学工科大学教師として招聘され、来日してから130年の節目に当た

ることから企画したものです。

また、今回は、日本下水文化研究会の分科会として発足したバルトン研究会の正式なスタートに向けたオリエンテーションの意味合いもありました。そのため講師の選定もひとひねりして、「バルトン研究家」に焦点を当て、東京大学教授の佐藤健二先生に、「浅草凌雲閣十二階とバルトン研究のパイオニア、喜多川周之氏について」と題してお話いただきました。

時代考証家として、NHKの朝ドラ『お貞ちゃん』の制作にも関わった故・喜多川周之さんは、プロの学者ではなく、石版画の画工だった若き日から、浅草十二階に関する、ありとあらゆるモノを蒐集しただけでなく、公的な資料にアクセスして、忘

れられていたバルトン氏にスポットを当てた在野のバルトン研究家。生前に蒐められた膨大な資料は、江戸東京博物館に「喜多川周之コレクション」として収蔵されています。

民間学を提唱する佐藤先生は、生前の喜多川さんと親交があり、詳細な聞き取りもされておられ



佐藤健二先生の講演(映像は喜多川周之氏)

ます。その成果は、『浅草凌雲閣十二階』（弘文堂）にまとめられています。今回は、明治時代の新聞記事などをもとに、浅草十二階について解説（小川一真が浅草十二階で開催した「百美人コンテスト」は、現代の「AKB48総選挙のシステムの先駆け」というお話には笑ってしまいました）。さらに、喜多川さんの遺族から提供された、古いテレビ番組のビデオテープを使って、バルトン及び十二階研究の黎明期を、関係者の肉声と鮮明な映像で紹介、特にバルトン氏について語る、孫・鳥海たへ子さんの生前のお姿を拝見出来たのは感激でした（放送当時、これらの番組をテレビで観ておりましたので、懐かしさを感じました）。

続いて登壇した英国在住のJSHC（日本シャーロック・ホームズ・クラブ）会員・清水健氏には、「エジンバラのバルトン記念碑から11年」と題して、バルトン氏とコナン・ドイルが生まれ育ったスコットランドの首府エジンバラにおける、二つの出来事（建物）について最新情報をお話いただきました。これは、下水文化研究会を中心とする有志による過去の活動のその後の検証という意味合いがあります。

清水さんはまず、幼少期のコナン・ドイルが身を寄せていた、エジンバラ郊外にあるバルトン氏の叔母の家「リバトン・バンク・ハウス」は、1999年にハンバーガーショップ建設のため取り壊しが申請され、世界のシャーロックアンやドイル研究者を

巻き込む大騒動になりましたが、関係者の皆さんの努力の結果、現在はConan Doyle Medical Centreとして動的保存が図られています。なお、清水さんは、バルトン氏もこの家に住んだと推測していますが、質疑応答でバルトン氏の母キャサリンが手放すことは考えにくいとの異論も出ました。

これに対して、バルトン一家が長く住んだクレイグ・ハウスは、敷地一体がナピア大学のキャンパスとなり、2006年のバルトン生誕150年の際には記念碑が、2009年にはベンチが贈呈されましたが、その後、残念なことに再開発計画が立ち上がり、風前の灯火とも言うべき状況にあります。記念碑はまだ建っていたものの、ベンチは行方不明という現状を憂いた清水さんは、今のありさまを画像で紹介して、大いに警鐘を鳴らしました。

清水さんはその後、日本スコットランド協会の稲永丈夫氏とも連絡を取り合い、状況を確認。記念碑は後日しかるべき場所に移設される予定があるそうです。最近、現地を再訪して、記念碑は撤去されていないが、周囲が掘り起こされていることなどを知らせてくれました。ここに掲載した写真は、清水さんが最近撮影したものです。この件については、日本の関係者にも広く情報をお知らせして、日本からも、ちゃんと見ていますよ、というメッセージを伝え続けていくことが大事だと考えます。



クレイグハウスの近影(清水健氏撮影)

講師の佐藤先生、清水さん、悪天候の中ご参集くださった皆様に改めて御礼を申し上げます。運営に不慣れな面が多く、ご迷惑、ご不快の念をお持ちになった方にはお詫びを致します。研究会の組織が正式に立ち上がるまでの世話人体制を拡充して、スムーズな運営を心がけて参りますので、御容赦下さい。

なお、バルトン研究会は次回、江戸川乱歩の「押絵と旅する男」などをテーマに、3～4月頃開催の予定です。また、8月には恒例のバルトン忌も行う計画です。今後は、講師に新鮮な人材を揃えるべく

努力し、告知に注力して、より多くの方に参加を求めています。春までには、バルトン研究会の組織も整備したいと考えています。詳細は、改めて告知させていただきます。

石井明男氏にバルトン記念賞授与

11月18日、研究発表会の会場で本会会員石井明男氏にバルトン賞がバルトン基金管理委員会より授与されました。受賞理由は、以下の通りです。

石井氏は、多年にわたり開発途上国の社会開発プロジェクトに携われるなかで、バングラデシュ・ダッカ市において住民参加型の新しい廃棄物管理モデルを根付かされました。このモデルは住民の公衆衛生の向上につながり、人々が自ら健康を守り、清潔な環境を創り出すことに寄与しました。また、この活動について、「クリーンダッカプロジェクト」という本(JICA 研究所出版)をまとめられました。石井氏の活動は、バルトンが明治期の日本に果たした役割と相通じるものがあると考えられます。

当日は、バルトン賞副賞の日本画を描かれた、鳥海幸子さんからのお祝いのメッセージが、稲場日出子さんより読み上げられ、表彰状、副賞の楯、日本画が代理で出席された奥様の石井百合子さんに贈られました。最後に、石井明男さんからのメッセージが石井百合子さんより、読み上げられました。

【鳥海幸子さんからのお祝いのことば】

昨年は、出版記念会で、皆様にお目にかかることができまして、忘れられないよき思い出となりました。没後 118 年を経た今も、曾祖父バルトンのことを、あたたかく偲んでいただき、まことにありがとうございます。

皆様のおかげで、『バルトン賞』という意義深い賞が設けられ、毎回、バルトンとゆかりのある、世の光ともいべき方々を表彰していただいていることを、曾祖父もどれほど誇りに思っておりますことか、子孫の一人として心より御礼申し上げます。

今回授賞される石井明男さんは、世界でも最も困難な状況にある地域において、環境も財政も厳しい現場で、その国の人々がよりよい生活ができるよう、そして、その国の未来を自分たちの力で切り開いていけるよう願って、長年、忍耐強く貢献されている方と伺っております。

ご健康とご活躍をお祈りし、お祝いの気持ちを込めまして、私の大好きな、琵琶湖の湖北の、やや青みがかった桜『蒼』の日本画を、お届け致します。

常に石井さんのご活動を支えていらっしゃる、奥様にも気に入っていただけましたら幸いです。

私は、曾祖父バルトンのおかげで、多くの素晴らしい方々と出会う事ができ、いつもご親切にさせていただいて、ほんとうにありがたく思っております。今は、少し体調を崩しておりますが、早く回復してまた、お目文字かないますよう。

2017 年 11 月吉日 鳥海 幸子

【石井明男氏の受賞のことば】

この度は、バルトン賞授与、本当に有難うございます。慎んでお受けいたします。

何よりうれしいことは、受賞理由になった「2003 年から 2013 年にわたるバングラデシュ国ダッカ市の廃棄物改善プロジェクト支援」、この一連の活動をまとめた「クリーンダッカプロジェクト」という本(JICA 研究所出版)の内容が対象になっていることです。プロジェクト自身は JICA プロジェクトですが、コンサルタントとして 10 年間活動してきましたが、常に考えていたことは、問題の解決を「技術的解だけにだけに求めず、社会や文化に根差した解を求めた」ことです。

1988 年頃からいままで、様々なことを下水文化研究から勉強させていただきました。

2003 年頃、ダッカのプロジェクトを始めた頃には、たぶん自然に下水文化研究会の培っている考え方や精神が石井にも自然に身につけていたと思います。そしてこの考え方をダッカの廃棄物処理改善に取り



鳥海幸子さん作の日本画・桜『蒼』

入れてゆきました。

当時ダッカ市は 800 万人にも届くという大都市で、ごみの排出量も年々増大し、ダッカ市は手に負えなくなっていました。もはや、収集車両を増やして解決するというようなレベルではありませんでした。

プロジェクトを始めてすぐに、この問題の解決は「技術だけでダメで、社会的な解決方法も絡めなければダメだ」と直観しました。それは下水文化研究会の根本的な考え方や精神そのものです。

その後 10 年間、ダッカのプロジェクトは、ひとくくりの表現を使えば、「解決への社会的アプローチ」

とか「住民参加型廃棄物管理」という面を強く意識しながら解決に向かいました。そして次第に問題への立ち向かい方がわかり、解決に向かってゆきましたが、その一連の取り組みや葛藤を「クリーンダッカプロジェクト」という本には書かせていただきました。

そのような背景や理由ですので、活動を理解していただき、石井自身はとても有難い気持ちで一杯です。

本日はどうもありがとうございました。

石井 明男

バン格拉デシュ便り No.40

記憶と記録

本会運営委員 高橋 邦夫

バン格拉デシュ農村地域における「エコサン・トイレの普及活動」では、トイレ導入前後の住民の生活環境に対する態様の変化に注目した分析を長年にわたり継続してきた。その際、予め無作為に抽出した同一の各戸を訪問し、面接法によるアンケート調査にもとづく分析とした。その内容として、生活環境全般にわたる設問に加え、世帯の所得や支出なども含めている。そして調査は年度を単位としている。ちなみにこの国の年度は会計年度に準じ、7 月から翌年 6 月までを単位とする。こうした長年の経験から驚く事実は、被験者（世帯主たる夫そして妻、まれに寡婦）は何ら記録めいたものの扶助はなく設問に答えたことである。ことに便益の推定に不可欠と思われる所得や支出にかかわる設問に対し、家計簿の所在を顕示してくれた世帯は、調査全世帯約 500 世帯の内、僅かに一世帯という事実であった。その記録はある種の感動をつのり写真に収めたものである。ほとんどの被験者は記録ではなく記憶に則した回答をしているという歴然とした事実が眼前にあるのである。このとき調査対象世帯の識字率は 90%であったことを付け加えておく。

記憶はある事象を、脳あるいは心に蓄えること、一方記録はそれを記述すること、したがって記録は記憶の文字化、数値化など記号化といってよい。また記憶という行為は個人の生理機能に依拠するがゆえに個人の消滅とともに消滅するという限界を有している一方、記録という行為は多くの人々に共有できる記号（ロゴス）という媒体を通すことで伝達性が加わることになる。記憶を記録に置き換える際には、ことに記紀や戦史などが物語るようにとんでもない記録者の

創作や意図的な改変が付け加わるのも事実であるが。

ほぼ同世代に生きた釈迦、孔子、ソクラテスはその弟子たちの記憶の記録化が無ければ存在しないのは事実であり、時代は降るがキリストもまた同様である。マハーバラタ、多くの仏典、論語、ソクラテスとの対話編、マタイ伝などの新約聖書の成文過程、文字を持たない文化に象徴されるアイヌ・ユーカラの成文過程など興味は尽きない。また、モーツァルト、ベートーヴェンなどの創作した音楽には楽譜という記録しかなく、その演奏は、例えばある指揮者、演奏家、演奏団体の解釈を通したものとなる。没後 200 年もの年月が経過しようという現在、往時の楽器に準じた演奏法なども含め千差万別の演奏が行われてきた、また行われている事実は何を意味しているのだろうか？ また記憶に残る〇〇、記録に残る〇〇などの表現は、おかしな表現というべきであろうが、それを超えた感慨を伴う事実もある。

先に、ほとんどの被験者は記録ではなく記憶に則した回答をしたという歴然とした事実が眼前にあると述べた。それでは、得られたデータの信頼性は評価できるのか、評価に耐えうるものかという疑問が生じるのは必然である。以下では、そうした回答の信頼性のひとつの検証のため、次のような調査を試みた。調査は活動村である 3 つの村を対象に、2013 年度そして 2014 年度に行った。2013 年度では世帯当たりの医療支出額（水系伝染病にかかわる）は与件であり、2014 年度では、同項目の支出額とともに前年からの支出額が増額したか、減額したかを聞いたものである。なお、調査対象の全世帯のうち家計簿を付けている世帯は先述のとおりわずか一世帯であった。

2013/2014 年度それぞれの世帯当たり医療支出額の分布を下図に示す（なお図中の数値 BDT は貨幣単位：1BDT=1.4¥である）。分布は対数正規型を示しており、正規分布を前提とした各種検定法の適用は困難であることが推察される。

そこで次に 2014 年度値と 2013 年度値との差（2014 値-2013 値）の分布を示す。以下では、医療支出費の年度差の平均値の信頼区間に注目し、年度差において±200BDT（気前よく信頼区間 99%とした）の回答に有意差は無いものとみなし、これらを超える回答値に対して、支出額の増額、減額という回答の適合率に注目した分析を行った。すなわち、回答の適合率を次式のように定義したわけである。

$$\text{適合率} = (N1 + N2 + N3) / \text{全回答数}$$

N1 : 年度差 > 200BDT ∩ 増額回答

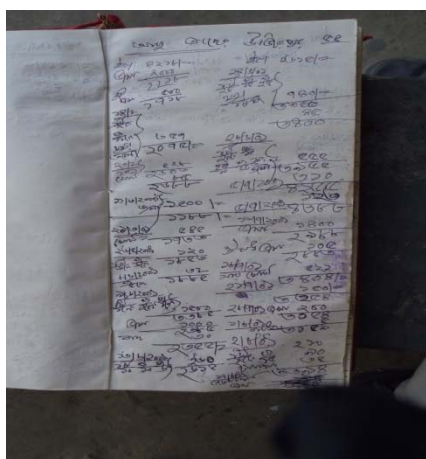
N2 : 年度差 < -200BDT ∩ 減額回答

N3 : (200BDT ≥ 年度差 ≥ -200BDT) ∩ 増減額回答

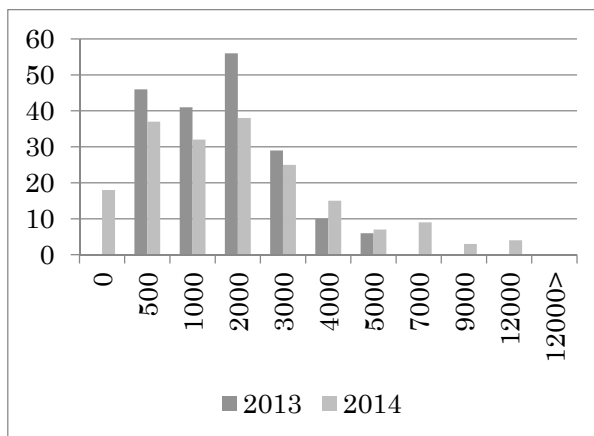
この結果は、オリジナルの回答に基づく適合率が

全体で 85%であったのに対し、誤差範囲を許容した（±200BDT（信頼区間 99%））の回答に有意差は無い）適合率は 95%に上昇することを示している。

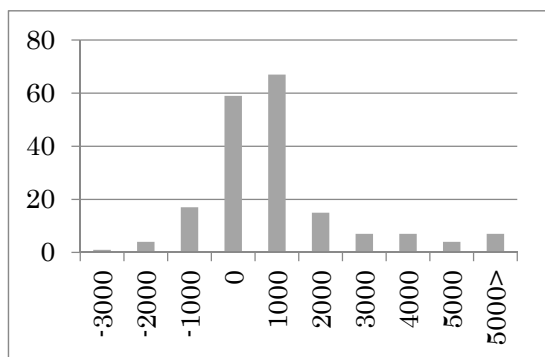
バングラデシュで活動している多くの日本人仲間から、彼らの記憶の良さを感嘆し賞賛する述懐はよく耳にすることである。一方で、定例会議やミーティングの席などでメモ、ノートの類を持たないスタッフの多いのも事実である。議事録などこちらが催促しない限り減多に出てこない。体験的には、社会的地位が高いスタッフほど何ら記録を取らないという放漫とも取れる無責任な態様が見てとれる。そうした彼らは、往々にして堂々と主張はするが、残念ながらそれは一般論の範囲を超えない場合が多い。そういう彼らにまず私が言い続けたのは地図を作れということである。きちんとした測量技術に則したものでなくても良い。要するにポイントを押さえたメモでよいのである。地図作りは記録づくりの第一歩と思うのだが。



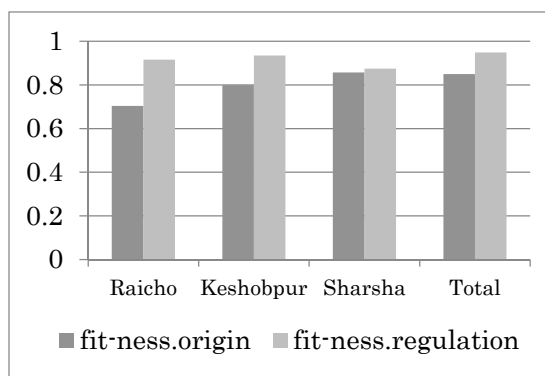
唯一得られた家計簿の写真



医療支出額の分布(2013/2014:横軸は BDT)



世帯当たり医療支出費の差 (2014 値-2013 値) の分布



回答の適合率
青色は増額・減額に呼応した適合率
赤色は上記定義式による適合率

海外技術協力分科会から

- 海外技術協力分科会では、JICA 草の根パートナーシップ型の 2017 年度第 2 回募集に「クルナ市都市スラム地区におけるコミュニティの主体的な衛生行動変容による健康リスク低減」というタイトルのプロジェクトを応募しました。研究発表会シンポジウムでも議論した内容で、人々の衛生行動の変容を促し習慣化すること、衛生に関心と責任をもって衛生管理を担える組織づくりを意図した活動です。対象国のバングラデシュは、依然としてテロのリスクが高く、海外安全情報では危険レベル 2（不要不急の渡航は避ける）の指定がされていることから、提案内容に十分な安全対策を見込むことが求められました。

運営委員会から

- 第 14 回研究発表会講演集をご希望の方は、下記メールアドレスまでお申し込みください。一部 1,000 円です。8 編の発表論文のほか、シンポジウム講演者の講演内容も納められています。
- バルトン記念賞授与式に受賞者の石井明男さんが出席できませんでしたので、別途受賞記念の講演会を企画しています。日程が決まり次第ホームページでお知らせいたします。

編集後記

関西支部長の木村さんから、活動を終えるにあたっての寄稿をいただきました。支部発足から足掛け 25 年、木村支部長のもとで支部活動が本格化してから 15 年、長い間お疲れさまでした。研究発表会とともに、四半世紀にわたり、継続してきたことは特筆に値すると思います。14 回の

下水文化研究発表会のうち、2 回は関西で開催させていただきました ▶ 本号の内容のほとんどは、11 月 18 日に行われた諸イベントの報告になりました。多岐にわたる活動を一日で済ませてしまいました。当日の関係者の皆様に感謝申し上げます。
(酒井 彰)

特定非営利活動法人 日本下水文化研究会

〒162-0823 新宿区神楽河岸 1-1

東京都ボランティア・市民活動センターメールボックス No.78

e-mail: jade@jca.apc.org

URL: <http://www.jca.apc.org/jade/index.htm>

URL(ブログ): <http://blog.goo.ne.jp/jadetokyo>